

「～さ」派生名詞と「～み」派生名詞に関する一考察

— 共起表現をめぐって —

国立台湾大学大学院生

曾 寶 儀

1. はじめに

「形態論」の観点からすると、語基はその「接尾辞」によって、その語の全体の性質、または品詞の分類が変わることがある。例えば、形容詞の語幹に接尾辞「-がる」が後続すると、全体は動詞の機能を持ち、形容詞から動詞になる。本研究は形容詞の語幹に接尾辞が後続した派生名詞について注目したい。その中で、形容詞の名詞化の中に、「～さ」と「～み」の派生名詞は本研究の調査対象とする。

接尾辞の「-さ」・「-み」の意味について辞書（以下の【表一】にまとめた）で調べると、両者とも「形容詞の程度・性質・状態」の意味を持つことが分かる。言い換えれば、同一の形容詞からなる「～さ」派生名詞と「～み」派生名詞は、共通点があり、類義語とも言える。その共通点について、外国の学習者にとって、曖昧を感じ、その使い分けを捉えがたいことがあるように思われる。従って、本発表では、「～さ」派生名詞と「～み」派生名詞について、その意味用法や相違点などを究明したい。

【表一】

辞書	「-さ」	「-み」
『広辞苑』	程度・状態	①程度・状態 ②所・場所
『明鏡』	性質・気持ちの程度	①性質・状態の感じ ②場所
『スーパー大辞林』	性質・状態・心理の程度	①性質・状態の感じ ②場所

2. 先行研究

従来の研究においては、接尾辞「-さ」と「-み」との比較について、おおよそ(1)接続制限及び生産性 (2) 接尾辞自体の機能 (3) ニュアンス、という 3 つの観点から、接尾辞「-さ」と「-み」との特徴や差異などが検討されている。以下、この 3 つの観点から先行考察のポイントを要約する。

2.1 接続制限及び生産性

湯・劉 (2010)、接尾辞「-さ」はあまり制限がないので生産性が高く、和語語彙・漢語語彙・外来語語彙の形容(名)詞語幹に後接することができ (例えば、痛さ、偉大さ、キモさなど)、願望 (～たい) や難易 (～がたい、～にくいなど) を表す補助形容詞も名詞化することができる。また、「-み」は和語語彙に限って、漢語語彙や外来語語彙には接続しなく、願望や難易を表す補助形容詞の語幹にも付加することができない、と指摘されている。だが、湯・劉 (2010) は接尾辞の前に来る語種の制限の相違について論じることにとどまっているが、接尾辞「-さ」と「-み」における意味用法の相違点などについては触れていなかった。

高橋 (2004) では、(例えば、「長さ」、「広さ」などのような) 1 次元的 (線的) な対象や 2 次元的 (平

面的) な対象は「-さ」派生語がよく見られるが、「*長み」、「*広み」、などのような「-み」派生語が起これないと述べられている。そして、(例えば、「温かみ」などのような)「-み」の派生語は 3 次元(立体的) な対象に要求されるから、生産性が次第に低くなると論じている。

2.2 接尾辞自体の機能

杉岡(2005)は接尾辞「-さ」と「-み」などの自体の機能を探求することで、生産性の差異の原因について説明されている。「-さ」は品詞転換(形容詞と形容名詞の名詞化)という文法機能しか持っていない接尾辞であり、即ち、「-さ」自体は特定の意味を持たず、そして、派生名詞の意味は、述語の名詞化の最も基本的な意味である「こと」と、形容詞の「程度」になると考えられる。というわけで、接尾辞「-さ」は文法機能が単純で、接続の制限の次第に低くなる。また、「-み」は「(属性の) 感覚」「場所」「点」などの意味を持つ接辞で、これらの意味と結合して新しい意味の名詞を作る可能性がある。その故、接続制限は高い。だが、杉岡(2005)は接尾辞「-さ」と「-み」についてはそれ自体の意味のみ記述し、即ち、語レベルにおける考察に止まっているが、接尾辞「-さ」と「-み」が接続する語基の意味性質と派生語の構文的な特徴との関連性については検討されていなかった。

中野(2005)では連語論の観点から、「たのし-さ」と「たのし-み」を 1 ペアとして、前後の共起表現の比較から、「-さ」は「質・量の程度に重点をおいた名詞」、「-み」は「その性質・状態そのもの」という結論が出された。

2.3 ニュアンス

藤井(2008)は認知論の観点から、「-さ」と「-み」の違いを比較したものである。「-さ」は客観的で一般的评价であるのに対し、「-み」は書き手の個人的な経験に基づいて、主観的评价である。また、「-み」派生名詞は有界性がある、具体的な形のイメージが与えられ、具象化されることと提示されている。

以上の研究は、接尾辞「-さ」と「-み」との比較について、接続制限やそれぞれの意味的な特徴について論じているものが数多くあるが、主に「-さ」・「-み」は語種の選定や接尾辞自体の意味制限などによる生産面の差異性に導く原因について議論されたものが殆どである。しかし、具体的にはどのような語基に接尾辞「-さ」・「-み」が付くのか、または派生語全体が文中においては、いかに使われるかなどに関しては、あまり言及されていない。

上述した問題点に関しては、本研究では派生語の語レベルのみならず、文レベルへ発展させ、考察することを通して、その意味用法や構文的な特徴を捉えようとしたのである。

なお、中野(2005)は、

転成名詞がどのような他の単語とむすびついているのか、どのような連語としてははたらいっているのかということを見るととき新たな意味が理解されてくる。

と提示されている。つまり、語との共起表現は語彙の意味理解に役立つわけである。しかし、中野は「楽しい」からなる転成名詞—「~さ」と「~み」1つのペアだけの考察をもって、あらゆる「~さ」・「~み」の意味を推論したのである。しかし、「楽しさ」と「楽しみ」だけをもって、果たして全ての「-さ」・「-み」転成名詞を説明できるのであるか。要するに、ほかの形容詞からなる転成名詞はまた検討する余地もあるし、使われ方の説明や「~さ」・「~み」派生名詞の意味用法についての説明などにも不十分だと思わ

れる。

故に、筆者は上述した中野の研究を踏まえ、考察対象を拡大し、コーパスを利用することで、「～さ」派生名詞と「～み」派生名詞の、それぞれ関連の実例を収集し、前後の共起表現に注目しながら、「～さ」派生名詞と「～み」派生名詞の使用実態や意味用法を考察する。

3. 考察対象、方法、目的

伊藤・杉岡（2002）によると、「-さ」形は非常に生産的で、意味も完全に予測できるので、一つ一つ心内辞書の中に蓄えておく必要はない。それに対して、「-み」形の意味は不規則なので、心内辞書の中にリストされていなければならない。その故、考察の対象を限定するため、筆者はまず、『広辞苑』の逆引きで、「～み」派生名詞を収集する。

ところが、「～み」派生名詞、例えば、「楽しみ」、「苦しみ」などは、動詞の連用形からなる可能性もある。従来研究では主に、一方的に形容詞に「-み」を付加するものとして扱われているが、しかし、この「～み」派生名詞について、一体動詞からか、形容詞からかは、また検討する必要があるように考えられる。

というわけで、集めてくる「～み」派生名詞を〈形容詞の語幹に「-み」が後続するからなるもの〉と〈動詞の連用形からなる可能性があるもの〉の二種類に分けて分析する必要があると思われる。

本発表は「～さ」・「～み」研究の初歩の段階として、まず、前者だけを分析対象と扱う。そして、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)から、形容詞から派生する「～み」派生名詞とそれに対応する「～さ」派生名詞をペアにして、それらの例文を収集する。

また、従来研究では、主に接尾辞「-さ」・「-み」の派生語という語レベルに限られ、筆者は更に文レベルまで拡張して、派生名詞「～さ」と「～み」の文中における振る舞いに注目したい。即ち、派生名詞と共起する名詞、動詞、構文などの側面から、「～さ」派生名詞と「～み」派生名詞の全体の意味用法を考察したい。

4. 考察

今回『広辞苑』の逆引きから、「～み」派生名詞は 31 語収集できた。その中の 20 語は形容詞の語幹に付く「～み」派生名詞である。この 20 語の「～み」派生名詞とそれらに対応する「～さ」派生名詞は今回の考察対象とする。

本節では、語基の性質、構文的特徴、共起動詞から、「～さ」派生名詞と「～み」派生名詞の特徴・相違について論じていく。

4.1 語基の性質から

本発表では、考察対象の派生名詞「～さ」と「～み」の転成する形容詞語基の意味分類から、接尾辞「-さ」と「-み」が付く語基の性質を論じる。形容詞の意味分類に関して、福原聡美の観点 を基準として以下の【表二】のように分類する。

【表二】

属性形容詞		感性形容詞			
		感覚形容詞		感情形容詞	
色	赤い 黒い	味覚	甘い 苦い うまい 辛い	心理	面白い ありがたい
形状	丸い	嗅覚	臭い		
量的な属性	深い 厚い 重い 高い 広い	感覚	痒い		
強度	強い 弱い				

本発表では、主に語数が一番多い「量的な属性」と「味覚」、二種類だけを対象にして調査する。

次に、それぞれの形容詞の用法を辞書で調べると、「味覚」に関する形容詞は基本的に実質のもの（モノ）を修飾するが、意味拡張で抽象的な物事（コト）も修飾対象となるのが見られる。

甘いお菓子／苦いお茶 （実質のもの）

考え方が甘い／苦い経験 （抽象的な物事）

他の「形状」、「量的な属性」に関する形容詞も、具体的・実質のものから抽象的な物事までを修飾する。

重い荷物／深い海 （実質のもの）

重い罪／深い意味 （抽象的な物事）

このように、形容詞は多義性を持っているが、「～さ」派生名詞と「～み」派生名詞の前に来る修飾語の意味範疇は必ずしも同じではないことが分かる。「～さ」派生名詞と「～み」派生名詞の前の修飾語の意味範疇に関しては筆者が【…の「～さ」】と【…の「～み」】というパターンで検証してみる。

{砂糖・果物・認識・対応、など} の甘さ （モノ・コト）

{唐辛子・料理・海・仕事、など} の辛さ （モノ・コト）

{野菜・肉・ご飯、など} の甘み （モノ）

{唐辛子・ニンニク・キムチ、など} の辛み （モノ）

{屋根・卵・道具・罪・責任・命、など} の重さ （モノ・コト）

{労働・歴史・現実・言葉・経験、など} の重み （コト）

{海・水・傷・信仰・愛情・知恵、など} の深さ （モノ・コト）

{理解・思想・問題・交流・過去、など} の深み （コト）

以上の例から見ると、「味覚」に関する形容詞の「～さ」派生名詞は修飾語が具体的なものから抽象的な物事まで、幅広く分布している。それに対して、「～み」派生名詞はより限定的に実質なもの、具体的存在するものの被修飾語として使われる。また、「量的な属性」の場合は、「～さ」派生名詞は上述したように、モノもコトも修飾語になる。しかし、「～み」派生名詞は修飾語が抽象的な物事に偏る。このような現象から、「～さ」派生名詞は名詞としての意味範疇が「～み」より幅広くて、形容詞の多義性を反映する。それに対し、「～み」派生名詞は意味が限定的であると明らかになった。

4.2 構文的特徴

本節では、収集した事例の「～さ」・「～み」派生名詞と前後共起する表現から、「～さ」・「～み」の構文的特徴を考察し、派生名詞の用法、性質を明らかにしたい。

前述したように、派生名詞の前に来る修飾語の名詞の種類では、「～さ」派生名詞は「～み」派生名詞より、多様性を持っていると言える。この意味範疇の違いは、動詞の使用傾向にも関わっていると考えられる。そして、派生名詞の後に共起する動詞を分析した結果、「～さ」派生名詞と共起する動詞は幅広く、限定的動詞に偏っていることが見られない。その上、「～さ」派生名詞自体はあまり主語にならず、常に【…の「～さ」】というパターンで使われる。それは「～さ」派生名詞の意味が広すぎるので、派生名詞の前に他の名詞が来て、それで修飾されることによって「～さ」の意味・性質が限定され、より明確にされるように思われる。

それに対して、「～み」派生名詞自体は大体において、かなりの比例で、「ある」という存在文の主語として現れる。特に【「～み」のある】という構文パターンが最も高い頻度で出現する。例えば、以下の例文(1)～(5)のように、【{モノ・対象・場所}に「～み」が加わる／ある】という文型は、「～み」派生名詞自体が意味の具体性や明確性が強いことを示すと考えられる。この現象からして、「～み」派生名詞自体の意味は「～さ」派生名詞より完備していると言えよう。

- (1) 言葉だけに重みがある。
- (2) 一方の皿に重みが加わって天秤が傾く。
- (3) 人間性に厚みが出る。
- (4) オレンジジュースに厚みが加わった。
- (5) 点画や字形に丸みがあります。

4.3 共起の動詞から

4.2 で述べたように、「～さ」派生名詞は意味範疇が広く、共起する名詞、動詞がバリエーションに富むと論じたが、今後、後ろに共起する動詞の意味分類を検討してみよう。

- (6) 自分が犯した罪の重さを思い知った。
- (7) 改めてその責任の重さを痛感しています。
- (8) 「折る文化」の深さを実感できるだろう。
- (9) 研究会を通じてこの考えの甘さを認識しました。
- (10) 実用性の高さを物語る。
- (11) 事故の衝撃の強さを物語っていた。
- (12) 悩みや辛さを伝える。

今回の「～さ」と「～み」派生名詞を含む事例の調査を通して、「～さ」派生名詞は以上の例文(6)～(12)のように、「考える・知る・実感する・思い知る・認識する」や「物語る・伝える」などの動詞とよく共起するとわかった。『分類語彙表』によると、前者の動詞は主に 2.3061 の「思考・意見」や 2.3062 の「注意・認知・了解」という分類に属している。言い換えれば、これらは「大脳の活動」に共通するから考えると、「～さ」は「情報」「事情」という特性を持つので、「思考する」や「伝達」の内容となる。

- (13) 波と舟という分ち難い関連性によって、夫婦間の絆の強さを示している。

- (14) 業界には、移行管理の甘さを示す実例がいくつもある。
- (15) 2 年連続全勝優勝も圧勝の連続で、層の厚さを見せつけた。
- (16) 韓国の伝統文化の強さを見る。
- (17) 日本の製造業の強さが現れているように見える。

一方、以上の例文(13)~(17)のように、「見る・見せつける・示す・現れる」などの動詞も頻繁に共起する。これは「～さ」が「はっきりと見える」という特性を持つのを示す。

それに対して、「～み」派生名詞は以下の例文(18)~(22)のように、

- (18) 私はいつもマヨネーズの酸味に丸みを出す為に牛乳を入れます。
- (19) 授業という仕事に面白みを見出せない。
- (20) 焦がしネギがさらに深みを出しています。
- (21) その男は、ラダ公国の弱みを見つけようと探り回る。
- (22) 歴史や社会習俗の厚みを探り出す。

よく 2.1210 「出役」の分類に属する「出す・引き出す・見出す・見つける」などの動詞と一緒に使われる。これらの動詞は「中・内にあるものを外へ出す」という意味に共通する。言わば、「～み」派生名詞は「本来表面からは見られない」という性質を有すると考えられるわけである。それで、後の動詞によって、その「本来表面からは見られない」が引き出されるといった表現に用いられやすいわけだと考えられるのであろう。これは上述の「～さ」の特性と反対になっている。要するに、「～み」派生名詞は、話し手が事柄の内容を、中から外へ抽出しようとする、といった内容に限定される傾向が見られた。

5. おわりに

以上、本発表では (1) 語基の性質 (2) 構文的特徴 (3) 共起動詞、という三つの面から「～さ」と「～み」派生名詞の相違点を考察した。

- a. 語基性質の分野から、「～さ」派生名詞はいずれも意味の多様性が高い、その形容詞語基の多義性を反映する。それに対して、「～み」派生名詞は語基の分野によって、意味用法が限定され、相違するのであるが、「味覚」に関する形容詞の「～み」派生名詞は「具体的なもの」に限定されるが、「量的な属性」の形容詞を語基とする場合は、かえって「抽象的な物事」に偏ると分かった。
- b. 構文的特徴から、「～さ」派生名詞は常に他の名詞によって「～さ」の意味・性質を限定しなければならない。「～み」派生名詞は存在文の主語として用いられ、「～み」派生名詞自体が意味の具体性や明確性が強いことを示すと考えられる。
- c. 共起の動詞から、「～さ」派生名詞は思考したり、伝達したりする限定的な内容（具体的、または抽象的のもの）として用いられることが見られる。一方、「～み」は積極的「表面からは見られない」「～み」派生名詞の性質が引き出されることによく使われる。

上述した考察結果を表にすると、次の【表三】にまとめられる。

【表三】

	「～さ」派生名詞	「～み」派生名詞
語基の性質	意味範疇は広く、共起する名詞、動詞が多様性を持つ。	語基の分野によって意味用法が限定され、相違する。
構文的特徴	派生名詞の多様性の意味は、常に【…の「～さ】といった修飾語により限定される。	他の修飾語などによらず、派生名詞自身の意味が完備かつ明確である。
共起の動詞	思考や、伝達といった限定的な内容。	話し手が事柄の内容を、中から外へ抽出しようとする、といった内容に限定される。

従来の研究では、主に語レベルに立って、接尾辞「-さ」と「-み」自体の意味についての検討だけが行われた。ところが、言葉の意味用法というのは、語自身の意味だけを究明することだけでは不十分と思われる。村木（2005）では、

単語における内容（語彙的な側面）と形式（文法的な側面——語形と他の単語との結合性など）とは密接に対応しあっている。多くの文法的カテゴリーは単語の意味の中にあり、単語の語形や単語間の統語的な関係の中に単語の独自の意味がひそんでいる。

と述べられている。本研究では、筆者は語レベルだけではなく、文レベルへ発展させ、派生名詞「～さ」と「～み」の文中における振る舞いに注目し、派生名詞の意味用法や、文中での役割などの点に関する考察を通して、両者の相違をより具体的に捉えられたと思われる。

本発表では、ただ形容詞の語幹に「-み」が後続する派生名詞だけを先に抽出し、そしてそれと対応する「～さ」派生名詞も含めて、両者を分析した。今後はこの考察の延長線として、「楽しみ」「苦しみ」「明るみ」などのような動詞の連用形からなる可能性があると思われるものも考察の対象とし、またそれらと対応する派生名詞「～さ」も合わせ、本発表のように意味用法や構文的特徴などについて検討する。そして、同一の形容詞語幹に付く「～さ」と「～み」派生名詞の全体像を見出すことが期待される。

参考文献

- 伊藤たかね・杉岡洋子（2002）『語の仕組みと語形成』研究社
- 村木新次郎(2005)「単語の意味と文法現象」『「日本語学」特集テーマ別ファイル（1）意味 I』明治書院
- 杉岡洋子（2005）「名詞化接辞の機能と意味」（『現代形態論の潮流』くろしお出版）
- 湯廷池・劉懿禎（2010）「形容詞の名詞化接尾辞：「-さ」・「-み」・「-め」と「-き」について」淡江外語論叢 2010 年 12 月 No.16
- 高橋勝忠（2004）「-th 接尾辞と「-み」接尾辞の派生制約」
- 中野はるみ（2005）「転成名詞の文中での意味のあり方—「たのし・さ」と「たのし・み」—」
- 福原聰美(2009)「『初級日本語』に導入されている形容詞の分析—語彙教育の観点から—」
- 藤井佳子（2008）「形容詞名詞化の接尾辞-SA と-MI の違いの認知的再考察」

辞書類

北原保雄(2011)『明鏡国語辞典第二版』大修館書店

国立国語研究(2004)『国立国語研究所資料集 14 分類語彙表一増補改訂版』大日本図書

新村出(2008)『広辞苑第六版』岩波書店

松村明(2006)『スーパー大辞林 3.0』三省堂

用例出典

国立国語研究所(2016)『現代日本語書き言葉均衡コーパス』